第二十四師團第二野戰病院史實資料

昭和二十二年三月二十五日

第三十二軍戦務整理部

第三四師團第二野戰病院史實資料

部隊長（第一年部長）　第一部隊編成表

小池少佐

將校		業務	下士官	兵
金子大尉	軍醫	教育、外科		
中島中尉	〃	統計、兵器		
島尾中尉	〃	内科、病理		
平林中尉	〃	外科		
工藤中尉	衛生	庶務	二四	六四
清水中尉	軍醫補	内科		
松崎中尉	主計	經理		
徳久中尉	薬剤	薬劑		
青藤（憲）見習軍醫		内科		
中村見習主計	〃	外科		

朱澤見習士官	外科		

隊長蜂谷大尉ヘ第二半部

將校		業務	下士官	兵
田村中尉	軍醫	外科		
遠藤中尉	〃	庶務外科		
太田少尉	藥劑	藥劑		
広瀬見習士官	軍医	外科		
野村見習士官	〃	内科	一六	五六
斉藤見習士官	〃	内科		
杉見習士官	〃	内科		
今井准尉	衛生			

昭和二十年六月十日及十三日ノ転属左ノ如シ

転属先	階級	氏名	階級	氏名	階級	氏名
三四八三部隊ヘ	中尉	田村忠夫	伍長	城戸茂次	伍長	高野忠
	見士	野村宣岳	〃	中島義角	〃	澤越歳盛
	軍曹	中町一夫	〃	白井文治	〃	久田武治
	軍曹	土井三鶴	〃	菱原松実	上等兵	中曽根敏男
	伍長	小箱政男	〃	白澤芳徳	〃	青柳長治
三四七四部隊ヘ	見士	斉藤秀左右	伍長	松田正治	伍長	高森寿吉雄
	伍長	林俊一	〃	有戸榮三郎	一等兵	向久三
三四七五部隊ヘ	中尉	平林馨	曹長	森川豊次	上等兵	杉本正信
	見士	中村淳之助	兵長	吉野支治	〃	橋本吉親
	〃	斉藤順道	〃	山中甚三	一等兵	向実
三四〇八部隊ヘ	伍長	中島吉雄	一等兵	松澤久男		松島三郎
三四七六部隊ヘ	〃	森政一	伍長	梅田健治	軍曹	森参治郎
		野田勉	兵長	浜中律郎	一等兵	

89L 42A 32L 22L 290 階級部隊

前記ノ部隊ハ同時ニ転属セシモノ

〃	上等兵	宮林義道	一等兵
〃	〃	神戸清一	〃
〃	〃	荒井綱雄	〃
〃	〃	広瀬金大郎	〃
〃	〃	山本幸次	〃
〃	〃	中本八郎	〃
〃	〃	竹中清吉	〃
〃	〃	蔦幸三	〃
〃	〃	渡辺正一	〃
〃	〃	宮澤國幸	〃
〃	〃	山田勝広	〃
〃	〃	古村義男	〃
〃	〃	峪候	〃
〃	〃	田中豊吉	〃
〃	〃	斉藤幹雄	〃
〃	〃	吉本和蔓千	〃
〃	〃	菊輝男	〃
〃	〃	石尾勝男	〃
〃	〃	北沢等	〃
〃	〃	塩沢富雄	〃
〃	〃	白田明久	〃
〃	〃	岡村富郎	〃
〃	〃	神田秀市	〃
〃	〃	小山政光	〃
〃	〃	苫林利夫	〃

第二 部隊履歴ノ概要

一、部隊長名

第二十四師團第二野戰病院

昭和十九年八月二日(傾) 金沢輜重聯隊ニ於テ動員完結(第九師團第二野戰病院)

九月十七日 金沢出発 九月二十五日 門司出帆

十月二十五日 沖縄本島着 同日部隊復員シ第二十四D第二Fとして動員完結

(九D二Fが二十四D二Fと変ル)

一、部隊の作戰南始時の編成

野戰病院長 小池勇助少佐(軍医)

第二半部長(庶務主任) 蜂谷早苗大尉

第一半部特校(人員約一〇〇)

隊長 小池勇助少佐(軍医)

庶務主任 工藤幸一中尉(衛生)

教育主任 金子良佐大尉(軍医)

〃 島尾二郎中尉

〃 林磐中尉

〃 中島頭中尉

〃 清水常郎中尉

第二半部 將校

隊長 ⑨徳久 志朗中尉（薬）

教育主任 松寄 鎮中尉（主）

庶務主任 中村津動 見士（軍医）

〃 斉藤順道 見士（〃）

〃 米沢新平 見士（〃）

蜂谷早苗大尉（軍医）

田村忠夫中尉（〃）

遠藤幸三中尉（〃）

太田信宮少尉（薬）

野村宣岳見士（医）

斉藤秀左右見士（〃）

杉 有方見士（〃）

廣瀬 廣見士（〃）

今井 新二准尉（衛）

一、指揮隷屬 配屬関係

昭和十九年一月二十五日 沖縄上陸 同日24D2FLとなる（前記）

2FLは二個半部に分れて業務を開始せり 第一半部は直ちに独混四四旅團に臨時配屬となり第二半部は24Dの病院勤務に服す

昭二〇・三・一 第一半部は原所屬に復帰、第二十四Dの業務に帰帰

斯の如く沖縄上陸後、2FLは二個半部に別れて業務に帰し作戦開始後も續いて二個半部に別れてわたが昭二〇・六・二 戦斗最終段階に迄く、合一、部隊となりて玉砕す、

一、戦斗実施場所

沖縄本島 島尻郡

一半部は富見城 二半部は小城に於て洞窟野戦病院を開設

四月末より五月初旬に亦り首里戦線救護班二班（二半部杉見士 広瀬見士を長とする）を分遣

又患者療養所（事実上は病院と同一業務）を十班分遣せり（讃口中尉、斉藤順見士、中村見士、斉藤秀見士、廣瀬見士、野村見士を長とする）

六月一日頃患者療養所と共に全FLを徴收し島尻南端糸満自然洞窟に後退し

其処にて業務續行せるも二月十八日馬来攻略を受け師團との連絡絶ゆ全員斬込にて終る、

三、先ず十二月廿日～十六日　一中部　1/3　二中部　2/3の人員戦列部隊に轉属せり

一、個人功績

一中部の功績は承知せざるも将校にて最も良く働きたる者は前項の◎記入のもの

二中部（人員八三）

軍医大尉　蜂谷草苗

人格高邁眞面目にして幸に老躯さいとはず部隊員に率先して先頭に立ちて働いた、あらゆる困難の状況に於ても上官たる権力を行使して贅沢したりする様な事は決してなかった、二中部が最後までよく結束して悠迫なる戦争に業務を完遂したるは蜂谷博士の偉大なる人格に部隊員が敬服していた為である、

衛生見習士官　野村宣岳

狭隘なる洞窟療養所長として軍医部の無理な申出に応じて多数患者の收容を引受け人命救助の重職に最も積極的に奮斗した、軍医部に大に賞讃された、

軍医中尉　田村忠夫

黙々として外科主任の職責に起居した、

衛生軍曹　谷口田五雄

戦斗前戦斗中共にあらゆる部門に於て最もよく働いた、兵員の作業の全般は彼が一人で宰配を振ったと言ってもよい

衛生伍長　小箱政男

〃　白井文治

〃　梅田健治

〃　吉野三雄

〃　遠山慶一

衛生兵長　赤倉政幸

〃　野田勉

〃　鍛冶谷佐市

上等兵　上田豊次

〃　岩崎芽元

〃　中村太七

何れも黙々として苦難に堪へて任務を完遂した最も優秀な日本人である、

附記

二半部將校として一言したい事は二半部は常に損な立場におかれた、戰線救護に編成の將部隊長は二半部より今遣せしめた、最後の轉戰列部隊轉屬も二半部と一半部と同數出されて殺され人員の少い二半部は高い比率であった、從つて生存者は一半部二十三、二半部八である、当時沖縄人兵がゐて人員約七一五〇対一〇〇位だつたと思ふ、

第三、部隊行動の概要

昭和十九年八月十九日第九師團第三野戰病院の編成完結、編成担當部隊は東部二十三部隊、編成場所金澤市、東別院編成人員總計一八二名、資材車載病院器械二組、ガス醫械二組、野戰手術燈滅菌機各二組、小銃一九ヶ主たるものなり

編成人員表左の如し

部隊長	將校	下士官	兵
軍醫少佐	軍醫 一六	衛生下士 二八	一二九
〃	藥劑官 二	主計 二	
	衛生獸官 二	憲衛 一	
	經理官 一	計	一八二

昭和十九年九月十五日 島尾中尉以下下士官兵計九名先發 部隊は同月十七日金澤市を出發 門司港にて九月二十三日乘船 其の間門司市に於て待機 海上輸送は貴人の如くならず 十月二十五日 那覇港に上陸せり 其の間三池港 鹿兒島港 奄大島に寄港 難儀したことあり

那覇港に陸と共同時に第二十四師團第二野戰病院に部隊転属となる。昭和十九年十月二十六日命により第二野戰病院は第一及第二半部はとなり第一半部は小池少佐以下一〇〇名第四十四独立混成旅團の指揮に入り其の主力は國頭郡本部半島の中央、満名附近に陣地を構築し、島尾中尉以下三十名は名護町高等女学校に於て野戰病院を開設

國頭地区の陸軍及海軍(主として母艦迅鯨の傷者)の傷病者を收療後送せり。

第二半部は澤大尉以下八二名を中頭郡知花に於て野戰病院を開設、師團の指揮下部隊の傷病者の收療後送をなせり。

第九師團の転進に伴ひ各部隊の整備地区変更し昭和十九年十二月二十日第一半部主力は中頭郡附近喜舎場(キシャバ)国民学校に於て野戰病院を開設し金子大尉以下三十名は名護町にとゞまりて患者療養所となり前任務を續行す。

昭和二十年二月十五日第一半部は独立混成第四十四團の指揮を脱し那覇港附近豊見城(トミグスク)に全員集結し三角兵舎の急造をなし傷病者の收療をなす。茨に洞窟病院の設営に晝夜を分たず努力、第二半部全員は島尻郡志多伯(シタハク)附近小城(オガスク)に轉進同地に於て主力洞窟病院の開設をなすべく整理作業に従事す。

昭和二十年三月二十三日頃敵の後海上を全く包囲せらる、此の頃第一半部豊見城第二半部小城の各洞窟病院は微塵の努力により完備しあり、晝間は全く洞窟外に出ること能はず如軍首里線を放棄するに當り六月二日島尻郡糸州に第二野戰病院の全部集結するまでの期間に於て左記の軍医を長とする約二名宛の救護班患者療養所を交互に派遣せり。

第一半部より　溝口中尉　島尾中尉　斉藤(順)見習士官、中村見習士官
末澤見習士官

第二半部より　斉藤(秀)見習士官、広瀬見習士官、野村見習士官　杉見習士官、

昭和二十年五月二十五日第二野戰病院は糸州に転進開始　同六月二日集結、糸州の自然洞窟に病院を開設す。

昭和二十年六月十一日及十三日、命により別表人員の転属あり、其の任務は衛生部の業務のみならず戰斗要員たりき、(歩兵部隊等の戰斗員減少のため)

六月十七日の夜より軍及師團司令部との連絡杜絶(全く)　六月二十三日夜師團司令部よりの患者護送員より左記要旨の命令を聞く、

「部隊は最早統率なき行動を為し難し、各自出血を強要すべし」

我部隊長は直ちに左記要旨の命令を下達す

「六月二十三日より同二十七日の間に於て二名至四名宛一班となりて出撃し出血を強要すべし

尚幸にして敵包囲線を突破し得る時は團司令部に到り支那軍に合し更に出血作戰に参加す

（し）」

六月二十八日 糸州の洞窟に於て小池部隊長は自決せりと傳へらる

個人功績

一、野戰病院なるを以て戰斗即患者の收容故に一般戰鬪部隊の如く其の功績に於

進級せしものなし

二、然れども昭和二十年六月六日 部隊長は糸州の洞窟に於て全員集合せしめ

「今日の如き狀勢に於て最早功績書類の整備等は到底不可能なるを以て

特に功績のあつたものを披露する」

とて左記の三名を挙げられしことあり、

其の一、中島中尉以下は第一線部隊の重要なる資材を輸送するにあたり彈雨の中

然も激しき風雨を冒し連絡をとり其の目的を遂行せり（豊見城し糸州内の輸送）

其の二、糸州の自然洞窟野戰病院の開設に当り島尾中尉以下の設營班は

連夜被彈の下資材を迅速に拾集し洞窟内の泥濘中に棚式寢台を構築し傷者

を早急に收容し得たり

其の三、南山曹長以下炊事係は食糧の窮乏せる本洞窟生活に際し晴中飛

彈にも屈せず食糧を獲得し部隊給与を円滑ならしめたり、其の内茶野下上等

兵の犠牲を出したるは痛恨に堪へざる所なり